山東考古錄
鄭小谷
全集本

寝ぼけ署長

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1970

河盛好蔵
奥野健男　監修
土岐雄三

寝ぼけ署長（山本周五郎小説全集・別巻3）

昭和四十五年六月三十日発行
昭和五十五年十月十日十八刷

定価一二〇〇円

著者　山本周五郎
著作権者　清水きん
発行者　佐藤亮一
印刷所　三晃印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部・東京(03)二六六—五一一一
編集部・東京(03)二六六—五四一一
振替　東京四—八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

寝ぼけ署長……七
中央銀行三十万円紛失事件……九
海南氏恐喝事件……三
一粒の真珠……五六
新生座事件……八三
眼の中の砂……一一
夜毎十二時……一四
毛骨屋親分……一七
十目十指……二〇六
我が歌終る……二三五
最後の挨拶……二六三
失恋第五番……二八七
失恋第六番……三三七

寝ぼけ署長

寝ぼけ署長

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中央銀行三十万円紛失事件

一

「とにかくあんな風変りな署長はこの市はじまって以来あとにも先にもみたことがないですね、なにしろ五年の在任ちゅう、署でも官舎でもぐうぐう寝てばかりいるので、口の悪い毎朝新聞などは逸早く「寝ぼけ署長」という綽名を付けるし、署内でもお人好しでぐうたら兵衛でおまけに無能だという専らの評判でした。

——世間がこんなに穏やかだからいいが、これが二三年まえだったら迚も勤まったものじゃないぜ。

——勤まる勤まらないは別として、あんなに暢気に寝てばかりいられないことは慥かだ。

——署長のためには誂えたような時代さ。

本署でも分署でも、若い腕利きの警部れんちゅうがそんなことを云うのを私もよく聞いたことがありました、本当にその期間はふしぎと犯罪事件が少なくて、寝ぼけ署長の前と後とを比較すると約十分の一くらいしか事件が無かったでしょう、それでよけい無能などという評判も立った

ものだと思います、在任ちゅうはずっとそんな風でしたが、いよいよ他県へ転任と定ったときは面白い現象が起こりましたよ、それまでお人好しとかぐうたら兵衛などと蔭口をきいていた人間が、まるで血を分けた親にでも別れるように悲しがるんです、本署と五つの分署では署員はもちろん小使から給仕まで泣きました、警察関係ばかりじゃ有りません、市民の中にもずいぶん別れを惜しがる者がいました、殊に貧民街などでは、ええ今では、ごろつきの温床といわれているあの富屋町から金花町いったいですね、あの町の住民達などは蓆旗を立てて留任陳情のデモをやったくらいです、決して誇張じゃありません、当時の市の新聞にその写真が出ていますから暇が有ったら見てごらんなさい、記事がまたふるっていました、着任した当時は辛辣に悪口をいった毎朝新聞までが、手のひらを返したように感傷的な惜別の辞を載せているから可笑しいくらいです」

話し手はここで言葉を切り、茶を淹れ替えてうまそうにひとくち啜った。静かな秋雨の降りしきる宵である、どこかの隅で死に後れたこおろぎが心ぼそげに鳴いているほか、四辺は森閑としてなんの物音も聞えない、話し手は茶を啜り終ると、肱掛け椅子の背にゆっくりと凭れかかりながら、いかにも楽しげな調子で語り継いだ。

「これは後任署長が来てずっと経ってからわかったことですが、寝ぼけ署長の在任した期間は、犯罪事件が非常に少なくて、起訴件数などは他の署長時代に比べると、四割以上も減っていました、詰りそれだから寝ぼけ署長でも勤まるなどと云われたわけです、ところで時間が経過するに従ってわかったんですが、そういう蔭口はまったく逆でなければならなかった、事件が少なく起訴件数が減ったのはひとえに寝ぼけ署長のお蔭だったのです、……その一例にお話しするのが中央銀行の三十万円事件なんですが、話のまえにいちおう署長の人柄を申上げて置きましょう。

署長は五道三省という名でした、年は四十か四十一だったでしょう、たいへん肥えた人で肩な

どは岩のように盛上っていました、顎の二重にくくれた、下腹のせり出した、かなり恰好の悪い軀つきです、細い小さな眼はいつもしょぼしょぼしているし、動作はなんとなくかったるそうだし、言葉つきはたどたどしくてはっきりしないし、全体として疲れた牡牛という鈍重な感じでした、……署長はこの本署のすぐ裏にある官舎に独りで住んでいました、ええまだ独身だったんです、そして当時まだ独身だった私が、署では秘書のような役をしながら、一緒に官舎で暮していました、といっても老人の料理番はいたし、その女房が女中の役をしていましたから、私としては官費で高等下宿にいるようなものでした、本当は署長の雑用をする筈なんだが、公用にしろ私用にしろ決して人の手を煩わさない人でしたし、前にも云ったように大抵はうつらうつら居眠りをしているという風ですから、結局のところ私の手を出す仕事が無かったわけです、ついでにもう一つ断わって置きたいのは署長の読書力です、英、独、仏三ヵ国語がやれ、漢文が読める、そして署長室でも机の上にはいつも新刊書が五六冊は積んである、私はどうせこれは「つん読」の方だろうと思っていました、だって事務さえ無ければぐうぐう眠っているんですからね、……ところが読むんです、二百頁から三百頁ぐらいの洋書なら三日から四日で片付ける、いつどうして読むかわからないがちゃんと読んでいる証拠には後から見るとどの本にも要所要所には赤と青との鉛筆でアンダーラインや書入れがしてあるんです、然もその多くが詩とか詩論とか文学史やその評論といったものばかりでした、これに就いては、もう少し紹介して置きたいんですが、そしてその必要もあるんですが、とにかく三十万円事件のほうへ話を移すとしましょう。

それは十月はじめのよく晴れた日でした、午前十時頃でしたが、太田という司法主任が入って来て「ちょっと署長に話があるんだが」と云うのです、その頃はもう署長の居眠りは誰知らぬ者もない事実になっていましたから、用のある時はまず私のところへ来る、そして私が署長室へい

って起こしてから入るというのが不文律のようになっていました、私は署長室へ入ってゆきました。

二

署長は肱掛け椅子の背に凭れて、肥えた腹の上へがくりと首を垂れて眠っていました。大きな事務卓子の上はきちんと片付いて、読みかけのハンス・ヤールセンの本が披げてあるきりです、これはその日に限ったことではなく、五年の在任ちゅうその卓子の上はいつも掃いたように片付いていて、曽ていちども書類などの散らばっているのを見た例がありません。そうそういつでしたか県の内務部長が（村松正作といって後に内務次官になった人で、寝ぼけ署長と大学の同期生だったそうです）訪ねて来て、君の机の上はいつ来てもきれいだな、と感嘆したように云いました、すると署長は例の舌ったるい調子で、

――ああ、いつも一時間もやると片付いてしまうんだ。

そう云ってけろりとしていました。

「ええ司法主任？」と、署長はもの憂そうに眼を明けました、それから椅子の上でもぞもぞと掛け具合を按配しながらのんびりと云いました、「どうぞ」

入って来た太田主任は、もう習慣になっていますからすぐ椅子に掛けましたが、普断とは違ってだいぶ緊張した顔つきだし、頻りに口髭を撫でる手つきも、明らかになにか事件の起こったことを物語っていました。

「署長、いま中央銀行の支店長が来て探査を依頼されたんですが、お会いになりますか」

「なにかあったのかい」はんぶん眠っているような、のろのろしたまだるっこい調子です、眼はつむったままです。
「現金が紛失したのだそうです、前週の土曜から日曜へかけての出来事で、まだ犯人も金も出ないと云ってます」
「前週の土曜、から、日曜、というと、……今日は、なに曜日かね」
「火曜日の十月三日です」と私が側から答えました。
「経過は、聴いたのかい、その……」
「概略は聴きました、然し精しいことは署長に会ってお話ししたいと云っています」
「君の聴いたところだけ聴こうじゃないか、それで会う必要があれば……」
「土曜日の夜、現金の三十万円入っている手提げ金庫を納い忘れたまま退けたのだそうです、その日はなんでも面倒な調査があり、それが午後八時頃まで掛って、お茶を飲んだりして退けたのは九時頃だったといいます、その夜の宿直は出納係の中村勇吉という青年で、日曜の朝九時に日直と交替し、日曜日の夜は角田なんとかいう貸付係の男が宿直をしています、そして月曜日の朝、支店長代理が金庫を明け、出納課長が手提げ金庫を出す時に一つ数が足りないのに気がついた、そこで慌てて捜すと、金庫はちゃんと在ったんですが、中の金がそっくり紛失していたというのです」
　署長はふんとも云わない、両手を腹の上で組んで、椅子の背に凭れて、眼をつむったまま身動きもしない、まるでぐっすり眠っているとより他に思いようがありません、然し主任は続けました。
「行内を隈なく捜す一方、すぐに本店へ電報を打つ、本店から捜査係が出張するのを待って本格

的に調査してみたのですが、三十万円という金の紛失は間違いのない事実とわかったのです、……勿論、土曜日から日曜日までの宿直と日直に当った三人は厳重に調べたそうです、家庭へも人がいって、ちょっと乱暴なはなしですが家宅捜索もしたようすです、然しその結果は凡て徒労だったというわけです、私の聴いたのはこれだけですが」

「外部から入った容子は……」

「土曜日の夜は絶対に無かったそうです、宿直の中村勇吉が神経性の不眠症にかかっていて、朝まで眠らずにいたし、夜中には一時間おきに行内を見まわったそうですが、外から人の侵入した容子もなし物音も聞かないと主張しています、日曜日には日直員の友人が二人来て話していきましたが、これは当直室だけで出納係の方へはゆかなかった、日曜の宿直員は小使の老人と十二時過ぎまで将棋を指してから寝たそうですが、これも朝まで異常は認めなかったと云うことです」

「君にいって貰おう」署長はだるそうにそう云いました、「私が会ってもしようがない、詰り、おもて沙汰にしないで、なんとかして貰おうというんだろう」

「たぶんそうだろうと思います、では私がいってまいりますから」主任はそう云って椅子から立ちました、「捜査主任と宮田を伴れてゆきます」

太田主任が出てゆくと、署長はぐうっと両脚を大きく伸ばし、むにゃむにゃ口を動かしたかと思うとまた眠りこんでしまいました。

太田主任たちが帰って来たのは午後二時頃でした、そして結局のところ支店長の話以上にはなんの収穫もなかったのです、ただ土曜日の調査というのが、支店事務の古い問題に関係したもので、八年前の帳簿まで遡って調べる必要があり、そのため退けるのが遅れたという理由がわかったくらいのものでした、尤も現金を検べて金庫へ納った（その内の手提げ金庫を一つ納い忘れた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com